

2024年 春季参加報告書

参加プログラム：国立台湾師範大学

参加時の学年：2年、学部：社会、学科：メディア社会

私がこの留学プログラムへの参加を決意したのは2023年の11月である。ただ台湾という国へ足を運んでみたい、異国の文化に触れてみたいという単純な理由で申し込んだ。当然中国語は喋ることができず、出国前にも特に勉強をしているわけではなかった。20日間という他の留学生に比べ短い期間であり、日本人観光客も多いことからそこまで困ることはないだろうと踏み、いざ現地へ向かった。初日はガイドの人が着いていたこともあり、想像通り一切困ることはなかった。ガイドの人には台湾の交通カードを発行を手伝ってもらい、加えてバスの乗り方を一から教わるなど台湾での基礎的な行き方を伝授してもらった。



大学初日は入学式とテスト、現地学生、プログラム参加者の交流会が行われた。テストはスピーキングのみと簡単なものだった。私は事前に現地の大学へ中国語の学習経験はないと伝えていたため、クラスは事前に決められており、その場でこれからの授業の内容の説明を受けた。当プログラムは外国人学生の参加者は少なく、交流会のメンバーは主に日本人で構成されている。プログラム参加者の中で、中国語を流暢に話せる人は2割程度だった。この2割の人たちは現地学生や教師たちと積極的に会話を行っていたが、その他の生徒は日本人学生同士で話している人が多い印象だった。翌日は大学現地の大学側から正式に発表されたクラス分けに従って教室へ向かった。私のクラスは日本人5名、オーストラリア人1名、アメリカ人3名

で構成されていた。授業では英語圏のネイティブたちが積極的に質問、ディスカッションを行うため、中国語についていくというよりは英語についていくのが困難だった。授業内ではペアワークも行った。クラス内で使用する言語は英語であり、またペア相手も日本人ではないため最初はスムーズにいかないことが多かった。

授業後は文化授業、校外学習がある。文化授業、校外学習は週にそれぞれ2回あり、そのほかの時間は自由時間である。考えていたより一人の時間が多かった。そのため自分で調べ、自分で行くところを決める必要がある。私が宿泊していた学舎は七張駅という場所にあり、その沿線上を主に散策することが多かった。台湾総督府や新店、西門の街並みを見に行った。休日は台北動物園や故宮博物館へ足を延ばした。故宮博物館は台湾一大きい博物館ということもあり収蔵品の数も多く、展示の仕方も工夫されており、圧巻であった。清朝康熙、雍正、乾隆三朝の時代に制作された琺瑯彩磁は特に印象的であった。17世紀にすでに色彩豊かな磁器が製作されていたことに非常に驚いた。この技術を生で見れたことが台湾での一番の収穫であると思う。



校外学習では九份、十份、淡水の3ヶ所を見て回った。3ヶ所とも台湾で有名な観光地である。全てプログラム主催側がプランを立てていたため、我々学生はただツアーに着いていくような感覚で行動した。目的地まではバスで移動した。校外学習は言語学習のみならず、台湾の文化を肌で感じる機会だった。九份、十份は学舎からは遠い場所にあったため、この校外学習がなければ行くことはなかっただろう。校外学習が用意されていたおかげで、台湾での生活はより充実したものとなった。

この20日間で私は中山という町を5回ほど訪れた。中山の赤峰街と呼ばれる地域一帯はバイクや車の部品修理店が多く、その合間合間に古着屋が並んでいる。日本をモチーフにしたカフェや飲食店も多くみられた。私は古着が好きなので、放課後や休日を利用して何度も訪れた。20日間の唯一のストレス発散方法がこの町へ行き古着を買うことだったと思う。この町は不思議なことにメインストリートは台湾特有の雑多さを感じさせなかった。さまざまな国の文化を取り入れ、そして自国の文化と融合し洗練した新しい流行を作り上げている場所であるがゆえに街の美化に力を入れているのだろうか。特に中山駅周辺は整備が行き届いていた。だがしかし、裏に一本入れば雑然とした建物が軒を連ねており、再び台湾らしさを感じさせた。この街は文化の吸収が非常に早いのだと考える。この町は数年後には文化面においてさらなる進化を遂げるのではないかと実際に現地を歩いて感じた。

今回の留学経験を経て感じたこと、得られた知見を学習の入り口として今後のゼミ活動に反映していくのが今後の目標である。言語面での成長は少なかったものの、この経験が私の人生の糧として在れば良いと考える。